

きた英世を待っていたのは、母の死の知らせでした。英世は、しずかに目を閉じ、何一つ言葉をだしません。吹き消された心のともしびを追い求めているようでした。黄熱病の成功も母のおかげだと思ふのでした。こうした悲しみのなかでも、英世の熱病の研究は、続けられました。

英世の黄熱病の研究について、年がたつにつれて、問題がでてきました。アフリカの黄熱病には、野口のワクチンが効かないという報告が、研究所にきました。この報告は、イギリスやフランスの学者だけでなく、ロックフェラー研究所員からもきていたのです。

「野口博士は、黄熱病の病原菌を見違えたのだ。」

「南米の黄熱病とアフリカの黄熱病とは、種類が違うのではないか。」
いろいろな意見が学者からだされましたが、だれも確かめていません。

野口英世ロックフェラー主任研究員は、アフリカ行きを考えました。